

資料館だより

Vol.50 No.4 (通巻249号)

2026. 3 .25(年4回発行)



絵葉書に見る魚河岸と港橋 「沼津名勝 魚河岸 FISH-MARKET NUMAZU」 蘭契社 榊原公幸氏提供

永代橋から下流の南側、狩野川右岸の宮町に魚市場が設けられる以前の魚町・仲町の魚河岸の様子を写した写真絵葉書を紹介します。

宛名面の通信欄が3分の1のもので、明治40年(1907)から大正7年(1918)の間に発行されたとされるものです。北側・上流側を望んだもので、同じ場所から下流に向かっての光景はすでに通巻232号で紹介しています。

表題には魚河岸とありますが、魚専用の荷揚げ場ではなく、西浦や内浦からの沼津通いの定期船などの貨物の積み下ろしや、乗客が乗り降りする船着き場としての役目も果たしていたようです。

岸側は魚町の名称があるように、魚を取り扱う五十集商人が多く住み、魚問屋があった近くの河岸が魚河岸と呼ばれたものであり、競りを行う魚市場のようなものが設けられていたのではないようです。

手前に係留されている船には船尾に「日進丸」と書かれており、内浦重須からの沼津通いの定期船のようです。発動機船と見られ、前方に屋根が架けられており、客席となっているようです、その船の背後には米俵のようなものを積んだ和船もあります。

岸側を見ると大八車に薪束のようなものが積まれており、岸縁にも同じものが置かれており、船で運ばれて来たものを降ろして、車に積んで運び出しているようです。岸壁には石垣が積み、階段も付けられています。また、積み荷らしい木樽のようなものも置かれています。後方には、港橋が写っています。レンガ造りらしい2本の橋脚とそれに支えられた木製の櫛形の橋桁が3連結されています。

この橋は、絵葉書に写された左岸側の親柱の銘文から明治38年3月に竣工したと考えられています。

右岸側には、流木除けが3列設置されており、左岸側が主要な流路であり、水深も深く船が着け易い反面、水害にも遭い易かったことが分かります。「出し」を設けて流れを弱めることもされていたようです。

大正10年(1921)に問屋制度が廃止され、大十魚会社が設立されると魚市場が永代橋下の右岸の宮町に設置され、昭和7年(1932)には(株)沼津魚市場となり、さらに戦中の統制下に設立された静岡県水産業会沼津販売所が、昭和19年(1944)に沼津港(現在の内港)に移転し、魚河岸・魚市場機能もそちらに移転しました。

藤田 美徳さんの話

静浦・内浦地区の漁師が信奉する水晶山の稲荷神社

伊豆の国市にある水晶山は、狩野川に架かる大仁橋のたもとにある標高67mの小さな山です。古くは水晶が採取されたとのいわれがあるため、この名があります。秋山富南が記した『豆州志稿』（寛政12年（1800）完成）には「堅巖峭立、清潭ニ映シテ佳景ヲ呈ス」とあり、屹立した水晶山とその山容が狩野川の水面に映し出される景観を賞賛しています。水晶山は近代以降の地誌や旅行記にも多く取り上げられています。

その麓にある藤田美徳さんの邸宅の敷地内には稲荷神社があります（写真1）。水晶山は景勝地としてよく知られていましたが、この稲荷神社はあまり知られていません。しかし、静浦・内浦地区の漁師からはよく知られた存在でした。前号までお話を聞かせて頂いた獅子浜の川口洋司さんから寄贈頂いた網組の帳簿にも、昭和時代初期に稲荷神社のある水晶山へ二度参拝した記録が残っています。資料館だより210～222号まで漁話を聞かせて頂いた内浦小海の網組、長宝組の金指貢さんからも女性たちが水晶山へ大漁祈願に行っているという話を聞いています。また、この稲荷神社には、「献燈 昭和三年（1928）五号網組 静浦村獅子浜」と刻まれた石灯籠が建っています（写真2）。五号網組は、川口組と同じ獅子浜の旋網を行う網組でした。

稲荷は農業との結びつきが深い神ですが、漁業でも漁を与えてくれる神として漁師から信奉されています。ですが、稲荷を祀る神社が数多ある中で、両地区の漁師が水晶山の稲荷神社を選んだ理由についてはよく分かっていません。藤田さんは二つの理由で両地区の漁師が水晶山の稲荷神社へ参拝に訪れると考えています。一つは、漁師は無事に陸地へ帰ってこられるように海から離れた神社へ行きたがるという点です。もう一つは藤田さんの父が西浦地区出身の漁師だったという点です。藤田さんの父の生まれは西浦久料で、西浦古宇の某家へ養子に入り家業の漁師を生業としていました。体を悪くして漁師をあきらめ、神職を志して大瀬神社で修行を行い、東京で神職の資格を取りました。水晶山の稲荷神社の神主に後継ぎがないことから稲荷神社を継ぐことを勧められ、藤田家へ養子に入り稲荷神社の神主となりました。これらのことから、両地区に近い海辺の稲荷神社より内陸の稲荷神社が選ばれ、中でも両地区に近い西浦地区出身の神職がいる水晶山の稲荷神社に参拝に訪れたと考えています。

水晶山の稲荷神社では稲荷の他に金比羅を祀っているといわれ、金比羅を祀る神社の総本宮である香川県琴平町の金刀比羅宮とも縁の深い黒い烏天狗と赤い天

狗の面が社殿に掛けられています。金比羅は航海安全と大漁祈願にご利益があるため、漁師も熱心に祀ります。

また、社殿には瓶に納められたウミヘビが安置されています（写真3）。これは内浦地区の網組から奉納されたものです。ウミヘビは竜神の化身とされ、大漁をもたらすものとして崇められています。先述の川口組でも竜神の祠を建て、ウミヘビを祭神として祀っていました。当館でも多比の網組が祀っていたウミヘビを所蔵しています。

稲荷・金比羅・竜神という漁師と縁の深い神々が祀られている水晶山の稲荷神社には、かつては大勢の漁師が参拝に訪れ、社殿や藤田家にて宴会が行われていました。時代が経るにつれ網組の解散が増え、稲荷神社を訪れる漁師は減っていきました。しかし、現在でも内浦小海の網組の女性たちが参拝に訪れており、漁師の操業の無事と豊漁を祈願しています。

（話：藤田美徳氏 昭和21年生まれ 伊豆の国市大仁在住）

参考文献：水晶山の会編・刊『水晶山』2018

戸羽山瀨編『増訂豆州志稿伊豆七島志全』長倉書店 1967



写真1：水晶山の稲荷神社



写真2：獅子浜五号網組が奉納した灯籠



写真3：内浦地区の網組から奉納されたウミヘビ

原町製紙の三極原料は何処から

—『大正拾年 白三極賣上買目扣帳』をもとに—

内田 昌宏

はじめに

かつて東海道五十三次の宿場のひとつとしての機能を果たしていた原宿は、明治維新を迎えて宿場が解体されると、新たな現金収入の道を模索することを余儀なくされた。そして、当時の原地区の先駆者たちにより、製紙や繊維関連産業などの芽生えがみられた。

筆者は以前、原地区製紙業のシンボリックな存在であった原町製紙について調査し、『沼津市博物館紀要』41に「原町近代初期のマニファクチュアの芽生え—原町製紙の軌跡を中心に—」と題して報告した(2017年)。

その際、原町製紙の原料の入手先や種類のことなどが調査課題に残された。今回、原町製紙の和紙原料である三極入手に関わる資料に巡り合ったので、その一端について紹介することにした。

和紙原料業「カゾ屋」に残された控帳

明治時代富士南麓では、和紙原料の三極栽培が盛んに行われた。その中心地であった現在の富士宮で、明治8年から昭和40年代まで、三極の栽培や原料加工、販売に携わっていたのが、和紙原料の楮に由来する屋号「カゾ屋」を名乗っていた河原崎家である。

この河原崎家に長年残されてきたのが、大正十年から昭和初期にかけて三極の販売の日付け、生産地、種類、重量、販売価格、販売先などが詳細に記録された『大正拾年白三極賣上買目扣帳』である(富士山かぐや姫ミュージアム所蔵)。

この控帳に記載されて



▲買上買目扣帳の表紙

いる三極の産地は、和紙

の手漉きが盛んであった甲州産が最も多く、この他に土佐産、若狭深川産などである。また、主要な取引先としては、古くから手漉きの歴史をもつ山梨県の市川大門や西島をはじめ、静岡県内の松野や今泉など個人の紙漉き場のみならず、岳南製紙や吉永製紙、原田製紙などとなり原町製紙の名が登場するのである。

原町製紙の三極取引状況

この控帳の中から、原町製紙に関連する項目をいくつか紹介する。ちなみにこの控帳に記載された「白三極」とは、三極の原木を切断・煮熟後に外皮を剥がし、天日乾燥して出荷する状態のものである。

最初に原町製紙の名が見られるのは、大正十年四月で注文数「甲州産白三極十四個」、最後に見られるのは、

大正十五年一月の注文数「白三極貳個」(産地は文字が薄く判読しにくい)である。この間、原町製紙の名が他の製紙工場や個人の紙漉き職人の名に混じって散見される。例えば、大正13年の項目には次のような記載がある(一部に店独特の符丁があるが省略する)。

「十一月三日 土佐蕪生三極八拾九個 此貫千五百五メ七百六十目 代金參千八百參拾九円六拾八錢也」

「十一月五日 稲子産白三極拾九個 此貫貳百四十三メ代金四百九十一円二十六錢也」

「十一月七日 土佐地ケ三極三個見本品 此貫五十卷メ六百目」

このうち、土佐蕪生(とさにろう)とは、現高知県香美郡香北町周辺で、和紙の産地として知られている。このことから、近隣地区だけでなく、四国方面からの三極も使用していたことが判明した。また、稲子は現富士宮市稲子地区である。さらに、「地ケ」(ジケ)とは、三極の品質を示す用語で、「特地ケ」(トクジケ)に対しての「地ケ」は標準的な品質を表している。当時は、単なる売買だけでなく、三極の見本品のやりとりもあったことがうかがえる。以上の事例の他にも現山梨県南巨摩郡南部町内船(うつぶな)産の三極などが使用されたことが記載されているが、詳細についてはまたの機会に紹介することにした。



▲大正11年3月～5月の原町製紙の名がある項目
まとめにかえて

原町製紙では、巻紙コピー紙や水引き・元結原紙などを抄紙していた。いずれも柔軟で丈夫な薄葉紙で古紙原料は適さず、高い品質が求められる。原町製紙が、当時紙幣や官公庁用紙の発行に携わっていた内閣府印刷局に納品するほど品質には定評を得られていた「カゾ屋」への注文を始めた背景は定かでないが、原町製紙と役員関係が深かった原田製紙との情報共有がもともとなっていたことも考えられる。また、三極以外の原料の種類や入手先、運搬手段などの資料もこれまでのところ判明していない。今後の調査課題である。

※掲載写真の原本は富士山かぐや姫ミュージアム所蔵

皇室ゆかりの地探訪5 しちめんさん よこやまとうげ 七面山と横山峠

『昭和天皇実録』に記載されている川村純義別邸や後にそれを買上げて増築した西附属邸に滞在した皇孫時代の昭和天皇(迪宮裕仁親王)、秩父宮雍仁親王(淳宮)、高松宮宣仁親王(光宮)が御運動と称する徒歩での散策に度々訪れたに場所に七面山と横山峠があります。

七面山は下香貫林ノ下の日蓮宗栄松山妙蓮寺の裏山で、標高は約38m、比高差は35mほどです。当時は、頂上の平坦部に七面大明神を祀るお堂が建っていました。七面大明神は、身延山久遠寺の北方にある七面山の山頂に祀られており、此处から分祀されたものと推察されます。

『塩満の民俗』によれば、戦前には塩満の青年会は年に3回、このお堂でお籠りの行事を行っており、毎月18日には地元の老婦人たちが題目を挙げていたそうです。

お堂は戦時中に高射砲の陣地を作るために取り壊され、女体像は本堂に移され、今も祀られているそうです。

七面山からさらに東に足を延ばすと徳倉村に向かう山道となり、横山峠に至ります。横山と徳倉山の鞍部に当たり、標高約80m、徳倉山の登り口でもあり、急峻な尾根道を登ると徳倉山(象山)山頂に至ります。沼津アルプス縦走の難所です。現在は展望が開けておりませんが見晴らしが良かったのかもしれませんが、御用邸から七面山までは約一キロ、横山峠までは約2kmの距離がありますから往復するとかなりの運動になります。



七面山 下香貫林ノ下



横山峠 下香貫前角

歴民からのお知らせ

企画展の開催について

令和7年度の企画展「ふうこうぜつ かゆうらん 風光絶佳遊覧の三津～伊豆の海辺に花開いた観光地～」を下記の通り開催しています。

1. 開催期間 令和8年2月7日(土)～同5月6日(水)
2. 展示会場 2階展示室
3. 展示内容 内浦三津を中心として展開されて来た観光の歴史を振り返ります。



企画展の展示の一部

内浦三津地区に設立されたホテル・旅館などの宿泊施設、水族館・海水浴場・遊覧船などの観光施設、政財界人の別荘を紹介しています。

また、この地を訪れて、素晴らしい眺望を表現した画人や歌人たちの作品も合わせて紹介しています。

井上靖の自伝的小説「しろばんば」の洪作少年がその美しさに感激した三津の風光を背景に発展した観光産業の変遷を振り返り、さらなる発展の糧となることを期待するものです。

三津坂を越えた古奈や長岡の温泉地と深いつながりがあったことが知られます。

沼津市歴史民俗資料館だより

2026. 3. 25発行 Vol.50 No.4 (通巻249号)

編集・発行 〒410-0822 沼津市下香貫島郷2802-1

沼津御用邸記念公園内

沼津市歴史民俗資料館 TEL 055-932-6266

FAX 055-934-2436

URL:<https://www.city.numazu.shizuoka.jp/kurashi/shisetsu/rekishiminzoku/index/htm>

E-mail:cul-rekimin@city.numazu.lg.jp